タフィーへのお話
Tales for Taffy

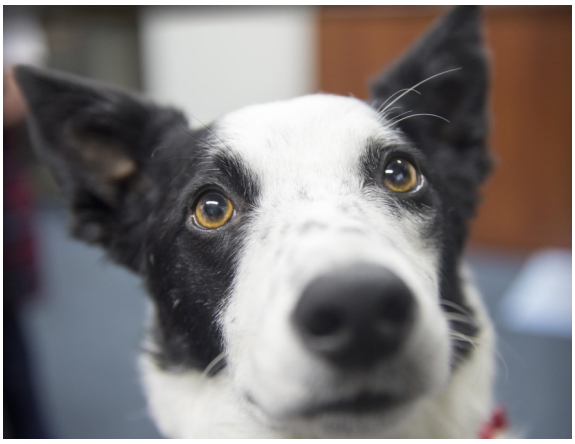
December 20, 2016

By Senior Airman David C. Danford
374th Airlift Wing Public Affairs

文章を理解するのに四苦八苦するにつれ、読む気がなくなってくる。読み書きの勉強を何時間もしたのに、ある言葉に引っかかる。そんな経験はあなたにもあるでしょう。文章につまづき、つっかえるほど、読み続けることが億劫になってくる。

すると突然、ビロードのように滑らかで、ちょっと湿った口があなたの腕をつつく。ふと見下ろすと、温かい黄金色の目の奥で、「だいじょうぶさ」と語りかけてくれる。あなたが気を落ち着かせ、再び読書を始めると、“読書介助犬”は耳をそば立てて聞いてくれる。

横田基地では、図書館と学校がセラピードッグ・インターナショナル認定のセラピードッグ「タフィー」の飼い主であるディーナ・メリンさんと協力し、読書に問題を抱えている子どもたちを支援している。このプログラムは「タフィーへのお話」という名で、毎週水曜の午前11時～正午と午後3時半～4時半の間の15分を図書館の貸出・返却デスクで予約することが可能。



カメラに向かってポーズするセラピードッグのタフィー

タフィーは、セラピードックとして読書に問題を抱えている子供たちを助けるための「読書介助犬」プログラムで活躍している（2016年12月7日撮影）

子どもが他人に読み聞かせを行うことは、読み、語彙、理解力を上達させるだけでなく、早く上達することを助けるための自信や自尊心を向上させる。しかし、うまく読めない子は、怖気づき、自意識過剰、冷やかしに対して恐怖心を抱いてしまう。“読書介助犬”プログラムの間、タフィーは公平な耳で静かに聞き、子供たちの読書力の向上を助ける。

「タフィーの直感力に驚かされます」とメリンさんは言う。「これまでに何人かの年配の方々をケアする中で、それを沢山目の当たりしてきましたが、今日、タフィーが子どもたちに寄り添っている姿に感激しました。タフィーは、一人一人の子に応じて必要なサポートを行っていました」

認定を受けたセラピードッグ「タフィー」がつけているバンダナには、セラピードッグ・インターナショナルのパッチがつけられている

タフィーは、ウェールズのボーダー・コリー犬で、子供、医療患者、高齢者への介助認定を受けている。タフィーは今、メリン家の幸せで健康な家族の一員だが、過去には全く異なる環境で生活していたことがあった。

メリンさんによれば、タフィーは子犬の頃、閉め切られた小屋で育った。最初の飼い主は年配の女性で、犬種の性質を熟知しておらずタフィーが要するものを満たすための体力も持ち合わせていなかった。タフィーは、遊び方や吠えることさえ知らず、大きな音に怖がり、窮屈な犬小屋によって股関節異形成不全症も患い、その後、地元の動物シェルターに送られた。それはまさに、コミュニティーで人を助けるための支え役となるレスキュー犬を探していたメリンと出会う絶好のタイミングと場所だった。

「これをすると決めて以来、私たちの家族にレスキュー犬を迎えたいと思っていました」とメリンは言う。「なのでイギリスに駐在している間、私はセラピードッグとしてだけでなく、私達の家族のためも働ける犬種を探しました」

認定を受けたセラピードッグとなるため、タフィーは、飼い主がいてもいなくても大きな音に過剰に反応せず、身体的に不快なことにも反応しない精神力を提示し、また基礎の服従コースを合格しなくてはならなかった。このほど再認定を受け、タフィーはセラピードッグ・インターナショナルのセラピードックとして3年間のあいだに2つの軍事施設で皆を癒すために働いた。

図書館長のエミー・ストーン氏は、“タフィーへのお話”を例とするプログラムを支援するかどうか決める上で、認定機関の存在は重

要だと語る。

「図書館などの場所では、認定を持っていることが不可欠です。それというのも、その犬が行動解析を受けてきていると知ることができるからです」とストーン氏は言う。「犬が認定を受けていなければ、ここに招いて子どもたちを任せることはできません」

タフィーは未だ吠えることができないものの、家族の愛情と世話のおかげで暗く惨めな過去を乗り越えた。きらきらと輝く黒い瞳とそば立つふわふわの耳で、タフィーはあなたの読み聞かせを楽しみにしている。

（英文：12月13日発行）